

---

# 座敷童を飼ってみた

小豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

座敷童を飼ってみた

### 【Nコード】

N4789V

### 【作者名】

小豆

### 【あらすじ】

ある夜突然そいつは現れた。フローリングの部屋に住み着くことになった座敷童。平凡すぎる生活が一変、笑いあり、涙(?)ありのはちゃめちゃんな高校生活が始まった。\*非現実コメディ小説です。初心者です。更新不定期です。鼻で「ふふっ」って笑えるような話を目指して頑張ってます。

## 登場人物（前書き）

随時更新予定。 ※ネタバレ注意

## 登場人物

### 加藤家

・加藤涼介 かとうりょうすけ

主人公。見た目の特徴はあえて上げるなら左目の下の泣きぼくろ。その他平均値を駆け抜ける普通の高校男子。

・座敷童 ざしきわらし

淡い青色の着物をきたおかつぱ頭の男の子。

見た目は五歳児。可愛らしい容姿とは裏腹に毒舌。涼介と契約を交わす。媒介は澄んだ水色のビー玉。

・加藤佳恵 かとうよしえ

涼介の母

・加藤孝治 かとうたかはる

涼介の父

・加藤トメ（かとうとめ）

涼介の曾婆ちゃん。ビー玉渡す。

### 学校

・長谷川一真  
はせがわかずま

涼介の幼馴染。ふわっとしたくせ毛で小柄な体格。陸上部、短距離。

・風間昶  
かざまあきら

黒髪黒縁メガネのクール系イケメン。陸上部、長距離。

・佐々木美歩  
さとうみほ

涼介の片思いの相手。栗色のセミロング。かわいらしい容姿。

・田辺千夏  
たなべちなつ

陸上部。美歩の親友。幅跳び。

・本田祥司  
ほんだしょうじ

涼介の担任兼陸上部顧問。

・森岡弘毅  
もりおかこうぎ

陸上部部長三年生、ハンマー投げ。

長身に逆三角形のがっしりとした体格。

・桜木春奈  
さくらぎはるな

陸上部三年、マネージャー。

スタイル抜群で学校No.1の美女。

・星野蓮  
ほしのれん

陸上部二年、長距離。双子兄。

ちよっとしたファンクラブができるほどの人気ぶり。

髪色はダークブラウン。

・星野珪  
ほしのけい

陸上部二年、中距離。双子弟。

兄の蓮同様人気者。髪色はナチュラルブラウン。

## 1、こんばんは変な奴

かとうりょうすけ

加藤涼介（16）

日本の普通すぎる一般高校生男児

見た目ふつう。特徴・・・

あえていうなら左目の下の泣きほくろ？

勉強そこそこ、運動そこそこ

あ、体力だけはちょっと自信あり。

それが俺です。

そんな俺、なんか最近ついています。

第一志望だった高校にも無事合格をはたし

中学から思いを寄せている子とも念願の同じ学校。

そんで今まさに目の前にはクラス発表の一覧が張り出され

1年2組12番加藤涼介

・・・・・・は俺で、

1年2組17番佐々木美歩<sup>みほ</sup>

はい、きた！美歩ちゃん！

席うまくいけば隣じゃない？

どっちにしろ近いよね？うわ、テンションあがる！

自然と顔がにやけるのかもしれない。

あ、ちなみに恋愛経験なんて今だゼロの万年片思い野郎です。

当たって砕けろ！砕けたー・・・がお決まりパターン。

なのでまだ俺の想いはまだ彼女には封印中です。

いいね、最近。なんかいいんじゃないのこれ？

青春してやろうじゃないの！

ちなみに部活動は陸上部に入部予定。

先ほと言った体力の自信はこれが理由なわけで。

中学から長距離をやっていて、走るのは好きだ。



「よう涼介！クラス一緒だな！  
中学に引き続き今年もよろしくー！」

「ぎゃー！！」

急に背中をばしっと叩かれた。

犯人は長谷川一真<sup>はせがわかずま</sup>、腐れ縁の幼馴染だ。

「まさか一真まで同じクラスなんてな。  
これなら新学期も心配ねえや」

にかつと笑いかける。ちなみにこいつも陸上野郎。

「までってなんだよ、またお前あれか？  
佐々木の名前しか見てなかっただろ」

「げ、ばれてた？」

「ばーか、お見通し」

けらけら笑いながら家に帰る。  
なんたって地元の学校だから、通学が楽なのもいい。  
一真と別れてひとりになると、自然と鼻歌を口ずさんでしまった。

そんなこんなで夜になる。

「なんか今日もいい日だったなー」

独り言を呟きながら自分の部屋のベッドに倒れこむ。

いつからだろう？

人生が平凡すぎてつまらなくて

とりあえず中学時代はそれなりに部活頑張っていたくらいで特に充実を感じたことはなかった気がする。

それがここ最近これだ。

なんか変わったことと言えば・・・

「・・・これか？」

曾婆さんからもらったお守り。

約半年前、亡くなる前にもらったものだ。

小さな赤い袋の中には澄んだ青い色のビー玉が入っている。

曾婆さんが大事そうにしていたものだったから、

受け取ったときは同じくらい大事にしないとと思った。

それからいつも肌身離さず見えないように首からぶら下げている。

「兄弟いないし、一人の曾孫だから大事にされてたのかなー」

手の中でビー玉を転がしてみる。

「綺麗だけど普通のビー玉なんだよな」

「ああ、だからそれを今すぐわしに返せ」

・・・え？

「だーかーら！返せといっておる！」

「出たー！ー！ー！！！！！！！！」

誰もいないはずの俺の部屋。

今日の前にそれはそれは完成されたおかつぱ頭の子供がいる。  
淡い青色の着物を着ていて、  
くりっとしたまん丸の瞳が俺をまっすぐ見つめている。

・・・いや、睨んでる。

「さ、叫ぶな！うるさい！」

「だ、ただ誰だお前！あれだな、幽霊！今、夜の・・・」

8時

「・・・え、ありなのこの時間？」

もう一度子供に振りかえる。

目がくりくりしているためとても愛らしい顔立ちだが  
おそらく男の子だろう。

一人称、「わし」とか言ったし・・・

「そ、そこらの幽霊なんかといっしょにするな！  
わしはれっきとした座敷童じゃ」

・・・え？

「・・・君いくつ？」

「少なくともお前より年上じゃ」

「いや見た目5歳・・・」

「知るかぼけ」

「・・・お家どこ？」

「今はお前の家じゃな」

なに・・・こいつ。



## 2、おかつぱ頭はちゃーむぽいんと

突如俺の前に現れたかと思うと人に向かってでかい口をきく男の子。さらっと座敷童だとか名乗ったけども何者かは定かじゃない。二人の間に不思議な空気が流れる。

その時、階段をぱたぱたと上がってくる足音がした。

「涼介―？ どうしたの―？」

母さんだ！

どうやら先ほどの俺の叫び声が下の部屋まで聞こえていたらしい。

「む、母殿か？」

座敷童もドアの方を向く。

これはこいつを追い出すチャンスじゃないのか？

「涼介―？ 開けるわよ？」

がちやっとドアノブが動く。

「ちよつと、母さん！」

俺はさっと目の前の座敷童を抱き上げた。

「ぎゃー！ 何をする！」

あ、つかめた。

しかもやはり見た目のまんま重さも子供。

「あんた声が大きいわよ、ご近所さんに迷惑でしょー」  
母が部屋をのぞきこんだ。

「見て母さん！この子供！いきなり俺の部屋に・・・」  
「子供？」

「ほら、こいつ」  
「どこにいるのよ、子供なんて。あんた頭大丈夫？」

・・・うそ？

「え、母さん見えないの？ほら、これ・・・」  
抵抗するのを諦め不機嫌そうな表情をしているが、  
確かに座敷童はおれの腕の中にいた。

「とにかくもう夜なんだから騒がないでねー。  
あ、お風呂まだなら早めに入っておきなさいよー」

そういうと母さんはドアを閉め、また下の部屋へと戻っていった。  
足音が聞こえなくなる。

俺は呆然とドアを見ていた。

見えてない？母さんにこのガキは見えてないの？

「おい」

痺れを切らした座敷童が俺を見上げる。

「いい加減におろさんか、無礼者」

「え？あ、ああ」

とりあえずまたベッドの隣へ座らせてやる。

「お前、俺にしか見えないのか？」

「基本的にはな」

「なんだよそれ」

「そのビー玉じゃ」

そう言うのと座敷童は俺の横に転がっているビー玉を指差した。  
さっきこいつを抱いたときに落としたらしい。

「それを持っている奴にはわしの姿は見える。

あと触った奴にも見えるようになる。

今その所有者はお前じゃろ？」

「なんで・・・いや、まず落ち着こう」

俺は大きく深呼吸をした。

「わしは最初から落ち着いておる。



お前が勝手に騒いでいるだけじゃろ、この小心者め」

「お前ほんと言葉悪いな」

「余計なお世話じゃ」

つつこむのはこのくらいにしないと永遠と続きそうな感じだ。  
俺は、座敷童がすぐにいなくなりそうにはないので、  
とりあえずこいつについて質問攻めしてみることにした。

「で、お前なに？」

「だから座敷童と言ったじゃろう」

「まあ普通の人間ではなさそうだな・・・」

さっきからこのビー玉を返せと言うがなんでだ？

これは俺が曾婆ちゃんから正式にもらった、俺のものだ」

「ふん、面倒じゃがちゃんと説明しないとだめみたいじゃな」

座敷童はだるそうに腕を組むと話し始めた。

「確かにそれはトメ殿がお前に渡した。

契約をお前に移したんじゃ」

「待て、お前俺の曾婆ちゃん知ってるのか？」

「あたりまえじゃろ！ビー玉の前の所有者はトメ殿、

わしが前まで契約していたのはトメ殿じゃ」

「契約とかついていけないんですけど・・・」

「あー！一から話すのは面倒じゃのー。」

まあ最初はお決まりパターンじゃ、しょうがない」

ふうつとため息をつき、また口を開いた。

「わしら座敷童は各々が前世で強い思い入れのあるものを媒介にしてこの世にとどめられる。

そしてそれを持つ所有者と契約をして見守るのがわしらの定めじや。

トメ殿は自分の意思でそのビー玉をお前に託した。  
つまりわしはトメ殿からお前に契約をのりかえたことになる」

「わしら、って・・・いっぱいいるのか？」

「あーまあ・・・じゃが安心しろ。」

パートナーで戦うとかなないから」

「いや誰もそんなバトル漫画期待してねえよ」

座敷童は真顔でさらっと変なこと言う。  
すかさずつつこまずにはいられない。

「じゃあ何・・・つまりこの半年間俺はお前に見守られてきたわけ？」  
／

「そうじゃ」

「じゃあ入試に受かったのも、クラスがよかったのも・・・」

「わしじゃ」

「アイスで当たり棒がでたのも、500円拾ったのも・・・」

「全部わしじゃ」

・・・あれ？

「なんか小さくね？」

「なにがじゃ」

「いや、座敷童ってもっとうこう・・・

宝くじ一等とか、埋蔵金見つけるとか・・・」

「お前が買わなきゃ当たるもんも当たるわけないじゃろ」

「そんなもんなの?!」

「まあ確かに・・・」

急にふっと座敷童はうつむいた。

「中には契約者の身代わりとなって

自分の命とはひきかえに

事故や病気から救う奴もおる・・・」

その表情は悲しそうだった。

「お前・・・」

「安心せい、涼介！」

にこっと顔を上げて微笑んだ。

こいつ、なんて優しい・・・

「お前が死ぬ時は喜んでそのビー玉を奪い  
次の素敵な契約者の元へ走るからの」

ふっと黒い笑みを浮かべている。

今俺は一秒前に抱いた考えを訂正したい気持ちでいっぱいです。

「お前可愛くないな」

「なにを！ トメ殿は毎日愛でてくれたわい」

「てか俺の名前知ってるじゃん」

「そりゃ半年・・・いや、お前が生まれた時から

トメ殿の横で見てきたからの」

「まじ?!」

「まじじゃ」

「そして俺は半年間も気づかなかったのか・・・」

「そりゃ、わしが気づかれないようにしてたからな」

「え?」

「学校にいる時は用具入れの中から。

部屋にいるときはあのタンスの上から・・・」

「怖い！ やめろ！ それ以上言うな！」

想像すると気持ち悪い。  
そして軽くストーリーカーなところに寒気がして  
思わず鳥肌が立つ。

「で、それはそうとなんで返さなきゃいけないんだ」  
「わしはお前がトメ殿が大切に使っていた曾孫だと知っていたから、  
これもわしが大好きなトメ殿の意思だと思って見守ることを決意し  
た」

「いいじゃんそれで」

「でも半年見守ってきて分かったんじゃ」

びつと座敷童は俺に指を向ける。

「お前、つまんない」

はあああああああ？！

「おい、こらガキ。人に指さすなって教わらなかったのか」

「知るか。とにかくわしはもうお前みたいなのやつに

小さな幸せやるのに疲れたんじゃ。・・・まあ飽きたみたいなの

「おい、ぼそつとなんか付け足しただろ」

「それともう一つ気づいたんじゃ」

「・・・」

黙って回答を待つ。

「わしってば、おばあちゃん子？」

「黙れおかつぱ」

「可愛がられるタイプ？」

「知るか」

「とゆーわけで、お前が契約破棄してくれれば  
わしは好きな人のとこにいけるんじゃ。  
分かったらさっさと所有権を譲れ」

確かにこんな生意気な奴、さっさといなくなってほしいと思った。  
が、俺は少し考えた。

今までつまらなかった生活が少し充実してきたのは  
全てこいつがきてからなわけだ。

人のおかげってのは癪にさわるが、

今までの平凡な生活に比べたら面白いかもしれない。

「よし、決めた」

「おお！ やつと返してくれる気に・・・」

「お前は俺と正式に契約したってことだ」

「・・・は？」

座敷童の笑顔が一瞬にして凍りついた。

「トメ婆ちゃんは俺にこれをくれたんだ。  
しばらくよろしくな、座敷童」

にっとなんかかけてやる。

座敷童は絶望的な顔で俺を見上げている。

「・・・幸せは、安売りせんぞ」

「まあいいだろう」

「おのれ、所有権をいいことに・・・」

「ところでさー」

座敷童を一回静める。

「・・・なんじゃ」

「お前名前ないの？座敷童って呼びにくいんだけど」

「・・・ざー君と呼べ」

「は？」

「チャームポイントはおかつぱ頭じゃ、よろしくな涼介っ」

ぱちっとウインク。

きらっと星が飛んだのは気のせいだろうか。

やけに手慣れた自己紹介。

「誰が呼ぶか！！」

どうやら開き直ったらしいこの座敷童。  
長い付き合いになりそうだ。

そしてこれが、俺の風変わりな非日常生活の始まりだった。



### 3、ニックネームも楽じゃない

ジリリリリリリリリリリ…

目覚まし時計の音が鳴り響く。

起きなきゃ、止めなきゃって分かってはいるが

布団から出たくないのが朝の誰もが初めに抱く欲求だろう。

あと5分…

その時だった。

急に体がずしっと重くなる。

なんだこれ？まさか、これがいわゆる金縛り…！

「起きろ涼介！朝じゃ！早くこのうるさいのを止めろ！」

うつすらと目を開けると目の前には鳴り響く目覚まし時計。

俺の体の上におかっぱ頭の男の子がまたがり、顔にぐいぐい目覚まし時計を押し付けてくる。

そしてだんだん寝ぼけた頭に昨夜の出来事がよみがえってきた。

加藤涼介、今日から晴れて高校一年生。

そして同時に座敷童との共同生活がスタートしました。ちなみにこの座敷童、見た目の可愛さとは裏腹に

「聞こえておるか！起きろボケナス！」

・・・かなり毒舌のようです。

「あーわかったから！」

俺は耳元に突き付けられた目覚まし時計のうるささに耐えきれず、カチツと音を止めるとしぶしぶ布団から起き上がった。

「寝坊は不幸とみなした。だから起こしてやったんじゃ、喜べ」  
「なんか幸せの提供のしかた、雑じゃない？」

俺は洗面台に向かい顔を洗い、着替えてしたくをすませると朝食をとるため一階の台所に向かった。座敷童もてくてくといってくる。

台所では母さんが俺と父さんの弁当の準備をしていて、父さんは中央のテーブルで新聞を開きながら朝食を食べていた。

母さんが驚いた顔で振り向く。

「あら、珍しい。私が呼ぶ前に自分で起きてくるなんて」

「今日から高校生だもんな、偉いじゃないか涼介」

父さんもコーヒーをすすりながらこちらを向く。

「あ、ああ。まあ・・・」

へらへらと笑いながら俺もテーブルについた。

「何を笑っておる、わしにたたき起こされただけじゃろうに」

隣で座敷童がぶつぶつと何か言っているが、

父さんも母さんも全く反応していない。

どうやら認識してないと声も聞こえないようだ。

朝食はトーストとサラダとソーセージに、昨晚の余りものだった。俺がトーストをほおぼると、それを座敷童がじっと物欲しげな目で見つめた。

「美味しそうじゃのう」

「ん、お前って食べれるの？」

「なんか言ったか？」

向かい側に座っている父さんが新聞から顔をあげた。

「い、いや何も！」

俺は慌てて牛乳を口に流し込む。

座敷童は話し続けていた。

「わしらは食べなくても平気じゃが、唯一の娯楽ってところじゃな。お前がわしにそなえてくれれば味わうことができる。

物を直接体に吸収はできないがな。

トメ殿は毎日わしにも食事を与えてくれたもんじゃー」

上目づかいでちらちらと俺を見てくる。

「ふーん・・・どうすればいいんだ？」

「食べさせてくれるのか！」

「別に無くなるわけじゃないなら、

お前が食べたそれを俺が食べればいいだけだし・・・」

「嬉しいぞ涼介！久しぶりの食事じゃ！」

するとまた父さんが心配そうな顔で俺を見る。

「おい、お前どうした？ひとりではそぼそ、やっぱり変だぞ」  
母さんが目玉焼きを運んできた。

「この子昨日の夜からちよっとおかしいのよ。」

子供！とか言って・・・

もう私に兄弟の期待はしないですって言うてるでしょー」

いや、誰も期待してないよと思いつながら目玉焼きを受け取る。

「別になんでもないって、ちよっとその、考え事を・・・」  
適当な言葉でごまかす。

隣では座敷童は早く食べたいのかそわそわしていた。

「涼介、こうじゃ！」

わしに向かって仏壇に参りをするように拝むだけでいいんじゃないか？」  
「え？　こうか？」

俺は座敷童に向かって両手を合わせて頭を下げた。

顔を上げた時、目の前にいたのは母さんだった。

いや、正確に言うとな座敷童を母さんの体が通り抜けている。  
体も認識してないと触れないのか・・・

と、感心していると母さんがわなわな震えている。

「か、母さんどうした・・・」

「涼介、あんた・・・」

「い、いや、これは別に」

「やめて涼介！　そんなに兄弟を頼まれても無理よ！」

「涼介、母さんを困らせるな！　そして俺も困らせるな！  
いや俺だってまだまだ現役ではあるが・・・」

「何言ってるのよあんた！」

「母さんも父さんも誤解だあああああ！」

加藤家三人、わあわあ騒いでいる傍らで、

座敷童は幸せそうに目玉焼きを口いっぱいにはおぼっていた。

「ざしき、ざっしー、ざしわら・・・」

俺は登校道を腕を組みながら歩いていた。

「何をぶつぶつ言っておるんじゃ？」

座敷童は後ろから俺の肩に腕を回してしがみついていた。  
左の耳元で声がする。

「お前の呼び方だよ」

「だからざー君と呼べと言っただろう」

「誰が呼ぶか」

呼べ！とぽかぽか頭を叩いてくる。

それにしても不思議だった。

昨夜抱き上げた時は確かに子供の重さを感じたのに  
今は背中に乗っかっているが少しも重さを感じない。  
頭の痛みは感じるが・・・

「お前、体重変えられるのか？」

「もちろんじゃ、わしを誰だと思っておる。」

お前の負担も考えてやっているんじゃない、感謝しろ」

「いや座敷童だと思うことにしたけど・・・」

「その気になれば空も飛べるはず」

「じゃあ飛べよ」

「いややっぱ飛ぶのは白装束しろしょうぞくというルックスの問題が」

「知るか!!!」

思わず声がでかくなる。

「そもそも座敷童って部屋にいるもんじゃないのか？」

「引きこもりも多いがな、基本的には契約物と共にいるもんじゃ。」

お前がそのビー玉を首から下げとるから、

わしもお前の近くなら移動可能じゃ」

「ふーん、まあ知らないところで変なことされるよりは

近くにいてもらった方が安心だな」

「それより涼介」

「ん？」

「お前もうちょっと学んだ方がいいぞ」

何のことだ？と思い周りを見ると

近くを通る人たちがやけに冷ややかな視線を俺に向けている。

いや違う、これはいわゆる痛い視線だ。

俺は急に恥ずかしくなり声を抑える。

「お前そういうことは早く言え！」

「ふん、教えてもらっただけでも感謝するんじゃない」

その時はたばたと後ろから足音が聞こえてきた。

「おはよう涼介——！」

一真が手をぶんぶん振りながら俺に向かって走ってくる。

「あ、一真おはよ」

俺に追いつくと背中をばしっと叩いてきた。

「はっはっは！なんだ涼介——！」

子供は学校に連れて行っちゃいけないんだぞ」  
相変わらずのテンションでけらけら笑っている。

ん？ちょっと待て、今こいつ……

「あれ？」

急に一真の顔からすっと笑顔が消える。

「あ……やべ、間違えた……」

「え、どうしたかず……」

「ごめん！今の気にしないで！



俺実は靈感あるとかそんなんじゃないからね！」

慌てた様子で両手を振り、また笑顔に戻ると走り出した。

「教室で会おう！」

「待て待てごまかすなー!!!」

俊足で走り去っていく。

今あいつ・・・

「完全にわしを見ていたな」

「やっぱり？」

なんだか額を嫌な汗が流れ落ちた。

「お前、靈感あるやつには見えちゃうの？」

「まああんな低能なやつらと一緒にされたくないが、部類は幽霊みたいなもんかのう」

「それって意外と見える人多いんじゃない・・・」

「わしは目が合ったやつは初めてじゃ。」

さっきの男はなかなか強い靈感の持ち主なんじゃろう」

「一真がそんな・・・今まで聞いたことねえよ」

「お前、人のコンプレックスを探るなんて最低じゃな」

「え、いやそんなつもりは」

・・・そうか、知られたくなかったのか。

とりあえず俺は、座敷童の存在に気付いてないふりを通そうと思っ

た。

さっそく新学期、ひとつの不安が生まれた。

「まあ、思い詰めるな涼介」

座敷童が後ろから耳たぶをぐいぐい引っ張る。

「・・・決めた」

「ん？」

俺はぐるっと首だけ座敷童に向け言い放った。

「わらし！呼び方、わらし！決定！」

「ふざけるなカス野郎！！」

そしてとうとう俺は、学校についてしまった。

#### 4、新学期のあのテンション

学校につくと新しい教室目指して  
廊下を進んでいく。

みんな新しい高校生活に心が弾むのだろう。  
がやがやと賑やかだった。

教室に入ると自分の席を探した。  
入って2列目の一番後ろだ。  
なかなかいい場所なんじゃない？

荷物を置き教室をぐるりと見渡すと、  
窓側の前の方に一真がいた。  
そして左斜め前の席には  
見覚えのある栗色のセミロング。

美歩ちゃんだ！

惜しい、あと一人！

でも一番見ていられる場所でもあるし、ラッキーかも・・・

なんて妄想を膨らましていると、  
気配に気づいたのか美歩ちゃんが振り向いた。  
いきなりのこととで高鳴る俺の胸の鼓動。

あ、今にこってした！

俺もすかさず軽く手をあげ挨拶をする。

片思いとはいえ中学が同じだったのだから  
もちろん顔見知りだ。

挨拶くらいならできる。

あまり話したことはないけど・・・

まさに天使の笑顔だった。

美歩ちゃんが前に向き直っても  
俺はまだ余韻にひたっていた。

ぱっちりとした二重。

ふんわりとした笑顔の中に  
見え隠れする少女らしさ。

まさに俺のオアシス・・・！

「うわ、なんじゃその気持ち悪い顔」

一気に現実に戻された。  
完全に鼻の下がのびていたらしい。

「い、いや別に・・・」

「先ほどこちらを向いた可愛らしい少女、  
あの子が美歩ちゃんかの」

「えっ？」  
なぜこいつが名前を・・・

「ふん、半年も見ればバレバレじゃわい、この若僧め」

「5歳児に言われたくない」

冷めた目で座敷童を見下ろす。

「ほれ、独り言は変人への第一歩じゃよ」

「この・・・っ！」

くっくくくと嫌らしい笑いをしているおかつぱ頭を思い切り殴りた  
かったが、

確かにまたまわりに変な目で見られるのは勘弁したかったので、  
俺はぐっと思いをこらえた。

「あの、ごめん、もうちょつと下がってもらえる？」

突然声をかけられ驚き顔を上げる。

「あ、ごめん」

俺は少し机を後ろに下げた。

少しワックスでいじられた黒髪に、スクエア型の黒縁眼鏡。その奥にはクールな瞳。整った顔立ち、いわゆるイケメン。どうやらこいつが俺の前の席の人物らしい。

こんなできあがったやつもいるんだなーと後姿を眺めていると、予鈴が鳴り響く。

「はい、皆さんおはようございまーす」

中年男の教師が教卓に立つ。

入学式は先日のクラス発表の時に終わっていたので、今日の予定はホームルームの後に授業が始まる。担任の自己紹介が始まった。

「えー、本日よりこのクラスの担任になりました、ほんだしようじ本田祥司と言います、どうぞよろしく」

ありきたりの名前にありきたりのルックス。丸顔の中年男だ。

頭の毛は明らかにヅラであろう雰囲気をかもしだしている。

配布物が一通り終わると、個人の自己紹介が始まった。

「名前と言ね、好きなものとか入部予定の部活とかでいいから。名簿1番から順番にいいうか。はい、じゃあ青木さーん」

照れくさそうに一番前の坊主の男が立ちあがった。

「えーっと、青木優あおきゆうでーす。

野球部入ります！どうぞよろしくー」

そんな感じに順番にすすんでいく。

俺はそれらをなんとなく聞き流していた。

早く自分の番を終わらせて美歩ちゃんの声を聞きたいなあ。

なんてことを考えていると、気づけば前の男の番がきた。

そいつがだるそうに立ちあがると、

急に女子のひそひそ声が大きくなったような気がする。

まあ、男が見ても一瞬釘付けになった顔立ちだ、無理もない。

俺はちよっと美歩ちゃんの反応が気になりちらっと目をむけた。

やはり隣の席の女子と何か話していた。

いいけどね、予想範囲内のことですよ。

「風間昶かざまあきひ。陸上部入部予定、どうぞよろしく」

簡潔にまとめ、軽くぺこっとお辞儀をすると席に着いた。

今、陸上部って単語が耳に入ったんだが。  
いや、気のせいじゃない。

意外な発言に驚き、戸惑っていたが

自分の頭を整理している時間はなかった。

座敷童がとなりから俺の制服を引っ張っている。

「おい、涼介。お前の番じゃぞ」

「あ、ああ」

俺はがたっと席を立つ。

「かとうりょうすけ加藤涼介です。

・・・えっと、陸上部希望。

よろしくお願いしまーす」

風間昶がぴくっと俺の自己紹介に反応する。

直後に同じ部活名を口にするほど恥ずかしいものはない。

そしてさらに意外なことに・・・

「ほう、風間も加藤も陸上部か！

顧問俺だからさ、よろしくなー」

まさかの担任が顧問！！

あのヅラ頭運動できるのか？！



俺は心の中でシャウトする。

本田はにこにこ愛想のある笑顔をこちらに向けている。

俺は戸惑いながらも片方の口角を上げて笑いかえしてみた。  
風間昶がどんな表情をしているのかとても気になる。

一真の方をちらつと見ると、

あいつも案の定口をぽかーんと開けて本田を見ていた。

俺が席に着くとまた自己紹介は再開。

隣で座敷童も楽しそうににこにこしながら聞いていた。

いよいよ美歩ちゃんの番がきた！

少し恥ずかしそうに席を立つ。

「佐々木美歩さきみほです。

早くクラスのみんなと仲良くなれたらいいと思います。

よろしく願います」

後ろにいるせいで顔が見えない。

でも可愛い声だけで俺の胸は十分に満たされた。

やばい、これは他の男も惚れるな。

俺がしばらく美歩ちゃんの余韻にひたっていると、  
また注目せざる得ない言葉が耳に入ってきた。

「田辺千夏たなべちなつです！」

陸上部入ります、本田先生お世話になります！」

俺を含め三人目の陸上部入部希望者。

何、そんなに人気あるのかこの陸上部？

やけに元気はつらつとした女の子。

その子が席に着くと改めて田辺千夏を見た。  
美歩ちゃんの隣の席だ。

前髪は長さがきれいにそろっていて、  
前下がりのショートカット。

遠くからでもわかる目力、猫って感じた。

気づけば一真の番だ。

窓側の一番前の席。

「長谷川一真。はせがわかずま」

陸上部希望、友達も彼女も募集中！よろしくー」  
元気なあいっらしい自己紹介だ。

「このクラスは4人も陸上部希望者がいるのか！  
顧問としては嬉しい限りだねー」

また本田がにこにこしていた。

その後も順調に進み、最後のひとりまで終わると  
また本田が仕切りなおす。

「春は出会いの季節、いいクラスにしていこうな！。  
はい、じゃあ提出物配りまーす。  
これ受け取った人から次の授業の準備に入ってね」

ちょうど良いタイミングで授業終了の予鈴が鳴った。

配布物が前から順番にまわってくる。

風間昶が振り向き、俺に配布物を渡すとじっと顔を見てきた。

「お前も陸上部なのか」

まさかむこうから話しかけてくれるとは。

「ああ、中学でやっててさ。よろしくな、風間」

「よろしく、昶でいいから」

笑い方ものつてもクール。

なんか性格もよさそうな感じだ。

こいつなら仲良くやっていけるかも。

こんなイケメンな友達ができるなんて、

まさかこれも座敷童効果か？

そう思いちらっと座敷童に目を向けると、

座敷童はふるふると首を横に振った。

こいつ、俺の心読めるのか？

「偶然じゃ」

ですよ

「つかこいつ、わしの好みじゃないし」  
聞いてないです！

すると生物の授業の用意をした一真が俺達の前に来てきた。

「次の生物移動だつてさ！」

「おう、一真」

「えっと・・・」

昶が一真に顔を向ける。

「こいつ一真。俺たち幼なじみでさ」

「なにに？ 2人とももう仲良くなったの？  
俺も陸上部仲間だから、よろしく！！  
一真って呼んで。俺も昶って呼ぶから」

一真は満面の笑みを昶にむけた。  
昶はくすつと笑った。

「子犬みたい」

昶の目が一瞬危ない雰囲気  
放ったように見えたのは気のせいだろうか。

「なにそれー」

はははっと一真は笑っているし俺の考えすぎだろう。

「ほら、2人も早く準備しなよ。

一緒に生物教室行こう・・・ぜ」

いきなり一真の視線が俺の横で止まった。

明らかに座敷童を見ている。

座敷童の方も無表情で

一真を見つめ返している。

「まだ居やがったか」

眉をぴくぴくさせながら

一真がぼそっとつぶやいた。

やっぱりこいつ見えてるな。

「何か言ったか？一真」

「いや！？何も？」

やはり気づかれたくないのか動揺している。

俺はとりあえず気づいていないふりを通した。

「さ、行こ行こ！  
遅れちゃうぞ！」

一真に急かされ、俺も昶も席を立ち、  
3人で生物教室を目指した。

行くまでの廊下では  
陸上が話題になった。

「明日みんなで放課後、  
グラウンドに陸上部見学行こうよ！」

提案したのは一真だ。

いいねーと俺と昶もすぐ賛成。  
ジャージとシューズも持ってこよう、など  
次々話が弾む。

座敷童は退屈そうに  
俺の頭に乗っていた。

時折一真の視線を感じたが、  
いい加減慣れてきた。

「それにしても、昶ほんと綺麗な顔だよな」

生物教室につくと、

一真がまじまじと昶を眺めた。

「どうも。一真も可愛い顔してるよ」

「可愛い？」

思わず俺が聞き返した。

「まあ確かに犬っぽいよなこいつ」

「嬉しくないよ、可愛いなんて！。  
かなりモテるでしょ？」

「いや、別に」

「またまたー」

俺と一真はへらへら笑う。

「どうせなら二次元みたいなの  
女の子にモテたいよね」

「またまたー」

・・・ん？

「そこのアイドルくらいの子なら  
相手してやってもいいけどさ」

「またまたー」

・・・あれ、またちよつと気になる発言。

「男でも可愛かったらいいと思うし、  
女はロリやドMに限るねー。」

どうせS気取るなら女王様気質なやつ虐めたおしたくなるもんじやない？」

くすつと優しい笑顔。

訂正します、真っ黒な笑顔。

さすがの一真も違和感に気づいたらしく  
笑顔がひきつっている。

「あはは、昶すげーS発言」

「あはは、実は俺様体質だろー」

俺と一真は冷や汗垂らしながら  
笑い飛ばした。



だが昶は俺たちの努力を  
冷ややかな笑顔で吹き飛ばした。

「俺だし？」

にこつと笑顔。

少し首を右に傾げる仕草。

これには俺と一真も思わずフリーズ。  
ヒヤッとした違和感。

笑い飛ばせない雰囲気。

座敷童は俺の上でにやにやしている。

すると予鈴になり、  
白衣をまとった女教師が入ってきた。  
号令がかけられる。

「あ、始まる。一真、席戻った方がいいぞ」

昶が何くわぬ顔で口を開いた。  
俺と一真も我に返る。

「あ、うん。じゃあまた」

慌てて席に行く一真。

礼をして授業が始まる。

女教師が自己紹介をしている間  
目の前の黒髪を見つめながら  
俺はやっと自分の脳内を  
整理することができた。

高校で初めてできたお友達。

そのイケメンは、  
どうやらナルシストの変態のようです。

## 5、普通は意外と珍しい

キンコーン カンコーン

1日の学校を締めくくるチャイムが鳴り響く。

俺は帰る準備を終えて、  
玄関で靴をはきかえていた。

「高校とはなかなか愉快なところじゃのう。  
ただ授業が長くて眠くなるわい」

隣で座敷童がぐーっと伸びをしている。  
確かに子供には疲れるところだろう。

「おい涼介、今わしのことを子供とか思ったじゃろ」

ぎろっと俺をにらむ視線が痛い。  
そうか、こいつ心読めるんだっけ。  
今日学んだ唯一の座敷童情報だ。

「じゃあ声出さなくても会話できるじゃん」

俺は思わずぼそつと呟く。

「それは少し違うぞ涼介！」

歩き出した俺に、座敷童は慌てて付いてきた。

「心を読むとき、わしらの頭には

お前の心はイメージで流れ込むのじゃ。

じゃから正確に言葉を交わすのとは違う」

腰に手を当てて偉そうに説明している。

「お前達が仏壇に向かって無言で

拝んでいるのを先祖は受け取るじゃろ？

わしらのもそれに近いといって良いかのう」

「ふーん…」

またまわりに変な目を

向けられたくなかったので、

俺は極力言葉を返さないように努めた。

「おーい！りょーすけえー！！」

その時後ろから聞き慣れた声と  
バタバタ足音が聞こえてきた。  
一真だ。

朝のように俺に追いつくと  
足を止め荒い息を整える。

「大丈夫か、一真…」

「い、一緒に帰ろ！」

汗だくの満面の笑顔をむけられる。  
くせ毛がふわっとはね上がった。

「ああ…っか言ってくれば待ってたのに」

「いや、いいのいいの」

俺と一真は並んで歩き出す。

途中までは方向が同じだ。

座敷童もてくてく俺の隣を歩いている。

「いやそれにしてもさ、昶って意外とかさー。  
人は見かけによらないよなー」

「いやむしろ見た目そのものなんじゃ…」

なんだか一真の話し方が  
いつもより不自然に感じる。

視線が相変わらず座敷童に  
ちらちら向いているからだろうか。

何度も何か言いたそうな顔を俺に向けている。

とうの座敷童はというと、  
一真と何度も目を合わせてはいるが  
一言も口を開かない。

いい加減じれったいな…

「おい、一真」  
「ん!？」

びくつとわかりやすい反応。

「お前、さっきからなんか俺に  
言いたいことあるんじゃないの？」

「え? えーっと…」

「なんかお前変なんだよ。

何年一緒にいると思ってんだ？

俺がお前の違和感に気づかないわけないだろ」

「涼介……」

すると突然、一真は足を止めた。

俺も立ち止まり一真に向き合う。

大丈夫、俺の心の準備はできていた。

たとえば一真が靈感抜群な不思議少年だろうと受け入れるに決まっている。

「……驚く、だろうけど」

「ああ」

「ど、どん引きするかもしれないんだけど……！」

「ああ」

「実は俺………」

さあ……

「子犬って言われたの、  
ちょっと嬉しかったんだよね」

………は？

「え…つと…」

「あ！ほら昶にさ、言われたじゃん？  
ちよつと喜んでる自分が…」

「それじゃないだろ！！！」

トラックが俺たちの隣をブーンと走りさった。  
俺はまさに開いた口が塞がらない状態。

なにさっきのくんだり。



あんだけためてじらしてこの落ちはないだろう。

改めて大きなため息をつく。

一真に言う気がないなら仕方がない。

もう一度、戸惑う一真に目を向けた。

「いや、いい…帰ろう」

俺は背を向け歩き出す。

「なんじゃ、つまらんのう」

座敷童も期待はずれの出来事だったのか  
ふいっと一真を置いて俺について来た。

「ちょ、涼介っ！」

ぐいっ

「……………ッ！！」

いきなり一真に腕を捕まれた。  
俺は思わず立ち止まり、  
驚いた目で一真を見る。

「かず……っ」

「違うんだ、俺が言いたいのとはそれじゃなくて…」

言葉を探すかのように、口をぱくぱくさせている。

「……………その…」

俺は黙って言葉をまつ。

一真の目は座敷童に向けられた後、  
再び俺にむけられる。

その瞳からは迷いの色が消えていた。

「…………俺、幽霊見えるんだ」

## 5、普通は意外と珍しい（後書き）

短いのは気分です、すみません。

以前に評価して下さった方

ありがとうございます！

読んでくれた方がいることに感動です！

なかなか書く時間がなくて不定期更新ですが  
よろしく願います。

## 6、おかっぱの本音

親友の突然の告白。

いや、誘導告白と言うのだろうか。

10年近くの付き合いになる親友が、

初めて勇気を出して打ち明けてくれたこと。

それは、幽霊が見えること。

「……驚かないの？」

「いや、驚いてるさ」

半分嘘だ。

だって朝から気づいて心の準備をしてたから。

「俺、ちょっと珍しいらしくて……」

見えるだけじゃなくて、触れちゃう、話せちゃう

その気になれば知ってる霊は呼べちゃうみたいなの……」

「まじか！」

今は本当に驚いています。

予想をはるかに上回る展開。

そんなアニメの主人公体質な奴が

こんな近くにいたなんて。

「それでっ！本当に言いにくいんだけど・・・

実は朝から涼介に男の子の霊が取り付いているんだ！！」

一真はビシッと座敷童を指差し語尾を強める。

「なっなんじゃと！」

わしをあんな低能な幽霊なんかと一緒にするな！」

座敷童は小さな拳を突き上げわめいているが、

一真は無視して話し続ける。

「でも安心して！ずっと見てたけど悪霊ではなさそうだし、  
なにより可愛い！！」

ぴたっと座敷童の抵抗がとまる。

「ほーう、わしの可愛いさが分かるなんて  
どっかのもやしとは大違いじゃ」

にたにたと横目で俺のことをみている。

一真め、無意識だろうがさっそくこいつから  
好感度を勝ち取りやがった。

俺は座敷童を睨み返してから一真に視線を戻した。  
興奮して顔が少し赤くなっている。

「お、俺、いい霊媒師知ってるから・・・！」

「一真」

俺は優しく微笑みかけた。

「ありがとう。実はこのおかげ、俺にも見えるんだ」  
「えっ?!」

気持ちいいくらいの驚いた表情。  
うん、いい反応だ。

「まさか、涼介も・・・」

「いや、違う、ちょっと待て」

俺は慌てて手のひらを前に出し一真の言葉を止める。

「話すと長くなる」

まあ、こいつが来てまだ1日しかたっていないけどさ。

一真は驚いた表情のまま固まっている。  
当然の反応だろう。

「なんじゃ、言ってしまうのか涼介」  
こちらにも驚いているやつがもう1人。  
会話している俺たちを見て更に驚く一真。

「とりあえず、家にこいよ」

俺は満面の笑顔で言い放った。

\_\_\_\_\_

俺は一真を自分の部屋にあげると、麦茶を2杯用意して部屋に戻った。

一真は早くも座敷童と打ち解けたらしく、俺がドアを開けた時には、すでに質問タイムが始まっていた。

「へえー！じゃあぎー君は涼介のおばあちゃんのところから来たん

だ！」

「そうじゃ。トメさんは優しくて暖かいお方じゃったわい」

座敷童はベッドの上で胡座あぐらをかき、偉そうに腕組みをしていた。

一真はフローリングの上に敷かれたカーペットの上で胡座をかき、瞳をきらきらさせて座敷童を見上げている。

「おい、一真。こいつざー君なんてキャラじゃないぞ」

俺はにやにやしながら一真に麦茶を差し出した。

「あ、ありがとう。・・・でもざー君て呼べって」

「こんなの、わらしで十分だ」

「何を言うか涼介！」

お前少しは素直な一真を見習ったらどうじゃ！」

座敷童がギャーギャー吠えている。

「わらしなんて可愛そうだよ。せめて・・・」

んーっと一真は考え込む。

俺と座敷童が黙って言葉を待つと、突然ひらめいたようにポンッと手を打った。

「ざきわら！」



「ザキヤマみたいに言うな」  
思わず俺はつつこむ。

「ざしわら？」

「いやじゃ！」

本人からの拒否反応。

再び一真はうーんと唸りながら考え込んだ。

その時、俺はいい考えを思いついた。

「そういや、わらし。お前ビー玉の話したとき、  
前世で強い思い入れのあったものって言ってたよな」

「ああ、言ったぞ」

「つまり、お前には前世があつたんだ」

「当たり前じゃ。お前、バカじゃろ」

俺は少しいらっとしたが話を続けた。

「じゃあさ、前世の名前でいいじゃん。

それなら文句ないだろ？」

「おー！涼介ナイスアイデア！」

一真と俺は座敷童に顔をむけた。

ぽかーんとした表情をしている。

・・・あれ？

「おい、どうなんだよ」

「ああ、それは無理じゃ」

あっさりとした返答。

「えっ！？なんで？」

一真も食らいつく。

座敷童は腕を組み、うーんと悩んだそぶりを見せると、不安そうな顔で俺と一真を交互に見た。

「お前らに話したところで、どうせ無駄だと思ったから言わなかったのじゃが・・・」

「何もったいぶってんだよ」

「なにか問題でもあるの？」

座敷童は少しうつむいて話し始めた。

「・・・座敷童にとって、前世の名を得ることは、この世から解放される鍵となるんじゃ。

その名で呼ばれたとたん、契約は解除される。

つまり、成仏できるんじゃ」

「えっ？」

思わず驚きの声がもれた。

「じゃあ・・・その後はもう、ざー君に会えないの？」

一真が寂しそうに問いかけた。

「そういうことじゃ」

三人の間に沈黙が流れる。  
部屋は緊張感につつまれていた。

「・・・さっき、俺たちに話しても無駄だと言ったな」  
俺は思い切って話を切り出した。  
真面目な顔で座敷童を見つめる。

「お前、成仏したいんだな？」

俺ははっきりと言い放った。

## 7、変な親友と変な俺

座敷童はうつむいた。

「・・・違う、と言えば嘘になる」

その声はいつもの毒舌ぶりからは想像できないような、細い声だった。

座敷童は目を伏せたまま話し続ける。

「この世は楽しい。何百年も、移り変わる世の中を見てきた。  
これからもどこまで変化していくのか、見てみたいと思うしのう・  
・

ただのう・・・」

座敷童はいつの間にかやら正座していた。  
小さな握り拳で、着物の裾をキュツと握っている。

「・・・母<sup>かか</sup>に、会いたいのじゃ」

「母さん？」

そうか、こいつのお母さんはもう亡くなっているんだ。

死んでから親に会えないで、この世にとどめられているなんて・・・

俺は座敷童が可愛そうに見えてきた。

「お前、ずっと寂しい思いを・・・」

「だからじゃ、涼介！」

わしにビー玉の所有権を譲って自由にしてくれ！」

「えっ?!」

「そうだよ涼介！」

ざー君自由にしてやれよ！」 「ちょ、ちょっと・・・」

座敷童と一真が2人して俺に泣きついてきた。

待て待て待て!!!

「俺は騙されないぞ！」

所有権譲ったところで成仏するわけじゃないんだから、  
それとこれは話が別だろ！」

しがみついてくる2人を全力で引き離す。

「えっ? そうなの?」

「一真、話聞いてただろ！」

「・・・ツチ」

「おい、わらし！舌打ち聞こえてるぞ！」

一真はポカーンとした顔で俺を見上げ、  
座敷童はさっきの涙はどこへ行ったのか、  
眉間にしわを寄せ睨んでいる。

「ただお前の気持ちはよくわかった。

協力してやろうじゃないの」

「なんじゃと？」

「名前、探してやるって言ってんの」  
にっと笑いながら座敷童を見下ろす。

「そうこなくっちゃ、涼介！

俺も協力するよ！」

一真も乗り気で笑っている。

しかしそんな俺たちとは裏腹に、座敷童は不安そうな顔をしていた。

「む、無理じゃ！そんな簡単に言うな！」

「まあ偶然分かったらラッキーじゃん」

「じゃが・・・」

「無理だと思うなら、お前が期待しなければいい。  
俺の退屈しのぎだ」

座敷童はまだ何か言いたげな様子だったが、  
最後には肩を落としてため息混じりにつぶやいた。

「好きにするがよい。わしの役目は見守る事じゃ」

「ざー君素直じゃないなあ」

一真が笑顔で座敷童の頭を撫でた。

「触るなモブ」

「モブ?!」

座敷童の冷ややかな視線にひるむ一真。

うん、どうやらわらしはツンデレだ。

少し頬が赤らんでいる。

俺は落ち込んでいる一真に話題を移すことにした。

「それにしても、お前がそんなすげーこと隠してたなんてなー」

「え？あー・・・」

いきなり話をふったせいで驚いたらしい。

頭をぼりぼり掻きながら、目はフローリングの上を泳いでいる。

「母さんにさ、誰にも言うなって言われてたんだ・・・」

一真はゆっくり話を始めた。

「かなり幼いころから見えていたみたいでさ。」

何もないところに向かって指さして、アーアア喋ってたって。

他の人に不審な目で見られたりしてて、

こんなだと外で友達ができるか心配だからって、

絶対にお外では喋っちゃダメよーって言われてたんだ」

一真はハハッと苦笑いをした。

「・・・俺、変でしょ。涼介は親友だから、絶対嫌われたくなかったから・・・」

目がチラッと俺の様子を伺う。

「一番知られなくなかったんだけどなー・・・」

また苦笑い。

俺はフーッと息をはき、腕を組んで一真を見た。

「俺の知ってるお前は、元から変だ」

「なっ?!」



一真は酷い！と言わんばかりの  
愕然とした顔になった。

「涼介、そんな言い方っ・・・」

「何年一緒にいると思ってんだ。  
お前が今更どんなビックリ人間でも、  
嫌いになるわけないだろ」

「・・・涼介！」

「元からウザいんだから」

一瞬の輝かしい表情が、また愕然とした表情に戻った。

俺は思わず吹き出す。

「くっ、ははは！何その顔！」 「だ、だって涼介が！」  
「冗談だよ、ジョーダン」

涙目で俺を見る一真を笑いながらたしなめる。

「気にするなって言ってるの」

そして座敷童に目を向けた。  
話に飽きて眠たいのか、うとうとしている。

「俺も変な仲間だ」

にひひつと歯を出して笑ったら、  
一真も同じように笑い返してくれた。

「うん、知ってる！」

・・・この笑顔は悪意無しで言っているのだろうか。  
一真に言われるとなんかイラつとする。

「本当にありがとう」

照れくさそうな感謝の言葉は、真っ直ぐ俺に入ってきた。

「なんかあったら、いつでも言ってよ。」

「ぎー君の名前探し手伝う」

「ありがとう。こんなの一真じゃないと頼れないからな」

俺たちは笑いあった。

その頃座敷童はと言うと、

ベッドの上で小さく体を丸め眠っていた。

俺の部屋には、並外れた霊力少年に座敷童。

なんだかおもしろいことが、またひとつ増えたように思った。

## 8、美女と野獣と時々わらし

今日は学校が始まって、2回目の登校日だ。とても長い2日間だったような気がする。座敷童が来て、1日の密度が以前より濃く感じるからだろうか？

今朝も座敷童にたたき起こされ学校に来た。まだ馴染まない教室で授業を受ける。そしてあつという間に昼休みになった。

新学期の学校は本当に時間が早く感じられる。

一真が弁当を持って俺の席にやって来た。昶も後ろを向き、3人で昼食を食べ始める。

「わー！昶の弁当うまそう！」

一真が昶の弁当を覗き込みながら叫んだ。俺も一緒に覗き込む。

きれいに焼けている卵焼きにソーセージ。野菜も入っていて彩りも鮮やかだ。

「ほんと、うつまそう」

「あー、これ自作」

「え！？料理できんの？」

「それなりに」

「すげー！」

こういう奴をできすぎ君と言うのだろうか。

一方座敷童は無関心のようで、

俺の母作弁当のハンバーグを幸せそうに頬張っていた。

たわいもない会話をしながら食べていると、次第に廊下が賑やかになってきた。

上級生の顔がチラチラ見える。

「何の騒ぎだろ？」

「今日から部活動勧誘が始まったみたい」

一真が箸で廊下を指す。

「ほら」

なるほど。確かに制服の生徒の中に、  
道着やジャージを着ている生徒が紛れているのがわかる。

「柔道部よろしくお願いしまーす！！！」

「俺、あーゆうの嫌い」

威勢の良い声を尻目に、昶がそう言って卵焼きを口に入れた。

「熱くなってる体育会系って無理」

「そーゆう昶も体育会系希望じゃん」

一真がご飯をかき込みながらつつこんだ。

「熱血はやなの。俺クールに走りたいから」

「そういや、専門種目聞いてなかったな。

昶は何やるんだ？」

口元に笑みを浮かべながら、昶の視線が俺に向けられる。

「初めの部活動集会までお楽しみ」

その瞬間、眼鏡の奥の瞳が輝いたような気がした。

食事を終えた頃、教室はいつそう賑やかになっていた。

多くの生徒が出入り口を行き交う中、一際目を引く美女が入ってきた。

明るい栗色で巻き毛のロングヘアー。

ブラウスからは谷間が覗いており、目を向けずにはいられない。

制服の上からでもEカップは推測できる、ボン、キュッとしたナイスバディだ。

「ね、君い。もう部活決まっていたりするー？」

甘い声で近くにいた男子生徒に声をかけている。

「なんか、すげえ姉さん入ってきたぞ」

一真と昶もすでに見とれていたらしく、すぐに頷いた。

「制服姿が犯罪だな」

「ダンス部？あ、キャバクラ部？」

「一真、キャバクラ部なんてあるわけないだろ」

「・・・虐めてみてー」

「昶、早まるな」

すると美女の後ろから、体格の良い男がぬっと教室に入ってきた。

顔立ちはまさに肉食系イケメン。

キリッとした眉にギンギンとした目つき。

髪は後ろに流されツンツンたっている。

180センチメートル以上あるだろう長身に逆三角形の体つき。

そのため教室の入り口が小さく見えた。

教室の女子の声が、心なしか大きくなった気がする。

「うわ！でかい人入ってきた！しかもイケメン」

一真が真っ先に声を出した。

「ラグビー部？」

「見るからに俺の苦手なタイプ」

「わしはあんなたくましい男になりたいがのう」

突然座敷童が会話に入ってきた。

だがもちろん聞こえているのは俺と一真だけで、昶には聞こえていない。

「ざー君のお墨付きなら・・・」

「おい一真!」

一真は俺のあわてた声にはっとなる。

良かった、昶は何も気づいていないようだ。

「サクラ! 収穫あったか?」

でかい美男子が大きな声で先に来ていた美女に話しかけた。  
声も迫力がある。

って、それより俺が驚いたのは2人が同じ部活だということだ。

「まじでか」

俺がぼそっと呟くと一真も昶も頷いた。

一真がごくりとつばを飲み込む。



「この学校、ホストとキャバクラあんのか」

「待て待て」

俺はすかさず一真を止める。

その時、美女とはっと目があった。

くすつといたずらな笑みを浮かべてこちらへ歩いてきた。

「やっほー。ねえ君たちいー」

ヤバイ。逃げられない。

俺は一真と昶に視線を送る。

2人とも諦めの表情を返してきた。

先ほど「サクラ」と呼ばれた美女が、  
少し腰をかがめて俺たちに微笑んだ。

ちょ、谷間っ・・・！

「ねえねえ！もう部活とか決まってる？」

「あ・・・まあ・・・」

俺はどぎまぎしながら答えた。

「やーん！君、子犬みたいに可愛いわね！

こっちの彼は眼鏡のイケメン！

私超タイプかもー!」

おい、俺を無視するな。

のどまででかかった言葉を、

上級生であったことを思い出しのみ込んだ。

隣で座敷童が俺を馬鹿にしたように笑っているが、  
気づかないフリをしよう。

「俺たちもう決まってるんで勧誘ならお断りします」

昶が真面目に言い切った。

こいつしっかりしてんなぁ・・・

「えー!残念ね。

まあ基本的にグラウンドで活動してるからさ、  
興味あったら見に来てよ。

陸上部よろしくーう」

美女は俺たちにウィンクをすると、軽く手を振り去っていった。

・・・ん?陸上部?

「あの人、陸上部って言った?」

恐る恐る一真と昶に訪ねる。  
わ、2人共青ざめた顔・・・

「ま、まっさかー！」

「でも、間違いなく言っただぞ。陸上部って」

一真の大げさな笑いを  
昶が冷静に否定した。

もう一度振り返ったが、  
もう先ほどの美女とイケメンの姿は  
見あたらなかった。

どんな陸上部なのかな。

とりあえず、来週の部活動集会が楽しみだ。

## 8、美女と野獣と時々わらし（後書き）

短いながらも久々の更新です。  
私情の忙しい時期が過ぎたので、  
また更新頑張りたいと思います。  
今後もし不定期な時もあると思いますが、  
よろしく願います！

## 9、人は見た目によらず

「・・・あ、100円みっけ」

今日も小銭を見つけてちよつとついでる俺。

「わしから溢れる幸運パワーのおかげじゃな！」

座敷童が相変わらず偉そうに腰に手を当て威張ったポーズをとる。

今はちょうど最後の授業が終わったところ。

俺はジュースを買うために自販機の前に立っていた。

目当てのジュースを買い、教室に戻ろうと廊下を曲がる。

その時だった。

「っわー!!」「きゃっー!!!!」

どかっとな誰かとぶつかった。勢いよく廊下に尻餅をつく。

い、いてえ……

っと、ぶつかってしまった相手を確認。

やべ、上級生だ……

いやそれより

超美人な女子生徒!!

「すみません！大丈夫ですか？」

俺は慌てて立ち上がり手を差し出す。

シヨートカットでめちゃくちゃ小顔。  
こんな美人とぶつかっちゃうなんて

やっぱり俺ついてる・・・！

「・・・大丈夫」

そう冷めた声で呟くと、俺の手を無視して立ち上がった。

おかげさまで、俺の沸騰していた脳内は一気に正常化。

すらっと細身で背が高い。

俺が174cmだから・・・  
165cm以上あるんじゃないか？

「あ、す、すみません」

「いいから、どいて」

「・・・」

あまりに冷めた表情に、何も言えない俺。

うわ、俺ってばチキン野郎！

なんて思っているとその女子生徒は俺の横を通り、  
すたすたと去ってしまった。



「自分でチキンを認めるとは立派じゃな」

「・・・うるせえ」

座敷童に笑われながら、俺は教室に戻った。

教室に入ると、一真と昶が俺を待っていた。

「おせえよ涼介！これから部活見に行くんだろ！」

「さっさと準備しろ」

「ごめんごめん、ちょっとハプニングがな」

そう、今日はこれから三人で陸上部を見学に行く。

入るとは決めているものの、

やはり実際にどんな雰囲気で活動しているのか見ておきたいものだ。

「よし、行くか！」

俺の準備が終わると、早速グラウンドに向かった。

多くの部活動が、始める準備を行っている。

俺達みたいに見学に来ている生徒も大勢いて、

グラウンドはなかなか賑わっていた。

その中でも、ひとときわ人の集まっているところがある。

ひとつは女子の塊で、もうひとつは男子の塊みたいだ。

集団の視線の先にいたのは

昼休みのナイスバディな美女だった。

確か・・・サクラ、さん？

「桜木さぁーん！」

「やべえ、マジ可愛い！」

「こっち見てー！」

1年生男子と思われる集団が、しきりに叫んでいる。

「あの人、桜木っていうんだね」

「・・・すごい人気」

俺は引きつった表情で呟いた。

「みんな来てくれたのね！ありがとう！」

ジャージ姿の桜木さんが、きゃぴきゃぴと男子に答えている。

あんだだけ可愛いきゃ、大半が色仕掛けにはまるのかもしれないだろう。

「なにこのオスの群れ！？」

「はーい、どいたどいた！」

星野ブラザーズのお通りだようー！」

突然2人の長身の男子が、群れをかき分けてグラウンドに入ってきた。

陸上部のジャージを着ている。

背丈も顔もそっくり。明らかに双子だろう。

ちよ、かなりハンサム……

「きゃー！星野兄弟きたあ！」

「アップお疲れ様あー！」

「蓮<sup>れん</sup>くーん！こっち見てー！」

「珪<sup>けい</sup>くん！タオルどうぞー！」

双子の登場と同時に、近くの女子の集団が湧き上がる。

凄まじい黄色い声の嵐・・・

「なにになにつ！？」

一真が慌てて耳をふさぐ。

「ここの陸上部、レベル高えな」

俺も耳をふさぎながら答えた。

「記録はどうだか知らないけどね」

昶も耳をふさぎ、迷惑そうな顔をしている。

双子の明るい茶髪が、太陽でさらにきらきらしている。

「これ、全部サクラ先輩の獲物？」

「相変わらずすごいっすねー」

「こら、珪。獲物とか言わないの」

「俺は蓮ですー」

「おい双子！おめえら目当ての女共も一緒だろっ」

会話をしている三人の中に昼休み桜木さんと一緒にいた、オールバックのイケメンが入っていくのが見えた。

「サクラ！顔じゃなくて体見て選んで来いっつったろ！」

「あら、ちゃんとこの後吟味するつもりだけど？」

「ちよ、先輩が言う状態に聞こえないから」

なんか楽しそうだな・・・

なんて思いながら眺めていると、急に隣で一真が叫んだ。

「あっ！！思い出した！」

「ど、どうした一真？」

「あのでかい先輩、ハンマー持ってるよね？」

確かに、オールバック先輩の片手には  
陸上競技のハンマーが握られている。

「昼休み気づかなかったけど、  
もりおかこうき  
あの人森岡弘毅さんだよ！」

「・・・誰だっけ？」

「二年前、突如現れたハンマーの新星！  
無名の選手がいきなり全国大会で7位入賞。  
しかも去年は5位！」

新聞や雑誌に取り上げられてたじゃん。  
制服姿だと気付かなかったなー」

言われてみれば、そんな記事を読んだ覚えがする。  
全国大会の常連人を差し置いて表彰台に登った男。

まさかこの学校の陸上部だったなんて・・・

「俺、他人に興味無いから。」

しかも自分の専門種目じゃないし、初耳」

興奮する一真を尻目に、昶がふうっとため息を漏らした。

「あやつ、そんなにすごいのか？」

いきなり座敷童が、ぴよこつと俺の肩から顔を出した。

「お前、興味あるの？」

「強い男は好きじゃ」

「いや、だから他人には興味ないって」

「あ、昶じゃなくて・・・」

「・・・は？独り言？」

あつぶね！。

こいつの声は周りに聞こえないんだった。

俺は昶に笑ってごまかし、再びグラウンドに目を向けた。

[illegible]

陸上部の見学を始めて20分。

多くの部活動がグラウンドで練習をしていて、それぞれに見学者も見える。

しかし今、

陸上部を見ているのは俺たち3人（十見えないおかつぱ1人）だけだった。



先ほどの群集が、幻だったかのように見あたらない。

恐らく原因は……

「ごるああああ！！珪！ラップ落ちてっぞ！  
この周から上げろっつたろうがああ！！」

おいこるああ！森岡ああ！！  
誰が休んでいっつた？  
さっさとベンチプレスやりに  
トレーニングルーム行きやがれ！！！！」

そう

叫んでいる声の主は桜木さん。

ストップウォッチを片手に双子のラップを計りながら、  
周りの部員にも声を張り上げている。

・・・まじ別人。

「さ、桜木さんの指導始まったら、  
みんなビックリしていなくなったね・・・」

一真が引きつった表情で呟いた。

「・・・あれ見たら、彼女目的で来た奴は入る気無くすよな」

俺も遠い目をして呟いた。

「同感だな」

昶もこくりと頷く。

「・・・あーいうギャップ、嫌いじゃないけどね」

・・・俺はそんな昶のギャップ嫌いじゃないよ、

と、心の中で呟いた。

それにしても、練習に励む陸上部の人たちの顔は  
真剣そのものだった。

女子の集団は、

「星野兄弟の邪魔しちゃだめ！」

と、リーダー格のような女子にまとめられ  
撤退していった。

確かにあんな良い顔して走ってる人たちに、  
キヤーキヤー邪魔する気にはならないだろう。

数名は、黙ってフェンス越しに見てるけど。

「おー！お前ら」

突然後ろから声をかけられ、三人同時に振り向いた。

担任の、本田だ。

あ、この人顧問だったっけ……

「見学か？参加も大歓迎だぞ」

陽気に笑いながら俺たちの横に並ぶ。  
黒いジャージに、中年太りの腹がぽんと目立っている。

「本田先生は指導しないんですか？」

「ん？するぞ？」

おずおずと質問した俺に、  
きよとした表情を見せる本田。

「ま、桜木に頼りっぱなしだけどな」

またハハハッと陽気に笑う。

それ、何もしてないってことなんじゃ・・・

「あ！本田せんせい！遅いですよー！  
あたしいー、跳躍組も見に行くんでー  
双子のタイム変わってください！」

本田に気づいた桜木さんが、  
こちらに向かって手を振り大きな声で叫んだ。

「おーう！じゃ、俺行くな」

そう言って本田はグラウンドの中に走っていく。

・・・今桜木さんのしゃべり方戻ってたよな

「おらおら蓮も落ちてっぞ！  
氣い抜くんじゃねえ馬鹿やろう！！」

再び怒鳴り声を張り上げる。  
凄まじい百面相。  
また味のある人に出会ったみたいだ。

「わらしが来てから、まともな人に会わねえな・・・」

「何か言ったか？ 涼介」

俺の小声の発言に、にやりと座敷童が反応する。

まあ、いつか。

これなら高校生活も  
飽きることなく過ごせそうだ。

「楽しみだな、部活動」

俺の突然の発言に、一真と昶が一緒驚いた表情をする。  
しかし、二人ともすぐににっと笑った。

「・・・だな」

「走りたくてウズウズするよ！」

「せっかくジャージあるし、ちょっと走って帰るか？」

「賛成！」

「いいね」

俺たちは着替えをすませると、グラウンドではなく、学校の近くの公園で走ってから帰ることにした。

俺たちがふざけあいながら走っている間、

座敷童は公園の、タンポポの咲き誇る芝生の上で、気持ちよさそうに日向ぼっこをしながら眠っていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4789v/>

---

座敷童を飼ってみた

2011年11月20日17時45分発行